

# 『皮膚と心』の成立

山 内 祥 史

## I

まず、初出に即して、小説集『皮膚と心』（竹村書房、昭和十五年四月二十日）に収載された作品の、作品名・発表誌名・巻号数・発行年月日・所載欄・所載頁等の諸項を、発表年月日順に記してみると、つぎのようになります。

- (1) 葉櫻と魔笛・若草・六月號、第十五卷第六號・昭和十四年六月一日發行・「小説」欄
- (2) 八十八夜・新潮・八月號、第三十六年第八號・昭和十四年八月一日發行・「創作」欄・260頁
- (3) 座輿に非ず・文學者・九月號、第一卷第九號・昭和十四年九月一日發行・「小品」欄・152頁
- (4) ア、秋・若草・十月號、第十五卷第十號・昭和十四年十月一日發行・「秋の手帖」欄・94頁
- (5) 畜犬談・文學者・十月號、第一卷第十號・昭和十四年十月一日發行・「創作」欄・82頁
- (6) 美少女・月刊文章・十月號、第五卷第十號・昭和十四年十月一日發行・「創作」欄・72頁
- (7) デカダン抗議・文藝世紀・十一月號、第一卷第三號・昭和十四年十月十九日發行・50頁

- (8) おしやれ童子・婦人畫報・十一月號、第四百二十九號・昭和十四年十一月一日發行・「小説」欄・178頁
- (9) 皮膚と心・文學界・十一月號、第六卷第十一號・昭和十四年十一月一日發行・6頁
- (10) 俗天使・新潮・新年特大號、第三十七年第一號・昭和十五年一月一日發行・「創作特輯二十三篇」欄・40頁

頁

- (11) 鷗・知性・新年號、第三卷第一號・昭和十五年一月一日發行・「創作」欄・160頁
  - (12) 美しい兄たち・婦人畫報・新年號、第四百三十一號・昭和十五年一月一日發行・「小説」欄・214頁
  - (13) 短片集・作品俱樂部・一月號、第二卷第一號・昭和十五年一月一日發行・「創作」欄・13頁
  - (14) 老ハイデルベルヒ・婦人畫報・三月號、第四百三十三號・昭和十五年三月一日發行・171頁
- ただし、右のうち(1)の「葉櫻と魔笛」は、初出誌確認がかわず、推測で記したものです。そこで、まず、(1)を右のように推測した根拠から、記しておきたいと思います。

まず、第一の根拠は、昭和十四年三月三十一日付手紙で、太宰治が中村貞次郎氏に近況を知らせた、つぎのような文面から、考えられることです。

私こそごぶさた申して居ります。このごろ仕事が少しづつ、んで居ります。四月號は、「文藝」と「文學界」にそれぞれ創作を發表いたしました。これは、いづれも下手くそなので、恥づかしいものです。四月中には、書き下し短篇集を竹村書房から出版いたします。全部未發表の短篇を集め、二百五十枚いちどに出版發表するのです。

ここに、「四月號は、「文藝」と「文學界」にそれぞれ創作を發表いたしました。」といっている「創作」とは、「懶惰の歌留多」(「文藝」第七卷第四號、昭和十四年四月一日)と、「女生徒」(「文學界」第六卷第四號、昭和十四年四月一日)とを指しています。所載誌「文藝」「文學界」各四月号は、手紙の文面へ發表いたしましたから

推測がつくように、昭和十四年三月三十一日の時点では、ともにすでに発行されていたものと思われまゝ。奥付によれば、「文藝」四月號は「昭和十四年三月十日印刷納本」、「文學界」四月號は「昭和十四年三月十日印刷」と記されています。また、「朝日新聞」昭和十四年三月十四日付（第二萬六百二十號）には、「文學界」四月特別號の廣告が所載されています。したがって、「文學界」「文藝」とともに、昭和十四年三月十四日頃、発売されていたものと、推測することができます。また、この手紙にいう「書き下し短篇集」とは、『愛と美について』（竹村書房、昭和十四年五月二十日）を指していますが、これは、「出版いたします」の表現から推測がつくように、昭和十四年三月三十一日の時点では、未発刊でした。実際に『愛と美について』ができあがったのは、すでに拙稿「『愛と美について』の書誌（二）」（『日本文藝研究』第二十二卷第一・二號、昭和四十五年四月五日）でみたように、昭和十四年五月十七、八日頃であつたわけです。かくして、手紙の表記、「へいたしました」「へいたします」は、それぞれの確に、三月三十一日の時点での状況を示していると判断され、「文藝」「文學界」の各四月號は、ともにすでに発行されていたと判断されるかと思ひます。

ところで、「太宰治年譜」のほとんどには、(1)の「葉櫻と魔笛」は、昭和十四年「『若草』四月号に発表」と記されています。しかし、もしも「葉櫻と魔笛」が、「若草」四月號に発表されていたとすれば、なぜこの手紙で、ふれられていないのでしょうか。「四月號は、『文藝』と『文學界』にそれぞれ創作を発表いたしました。」という表記からいって、「若草」の誌名も記されていて、いふように思うのです。また、太宰治の前著『女生徒』（砂子屋書房、昭和十四年七月二十日）には、すでに拙稿「短篇集『女生徒』の成立」（『神戸女学院大学論集』第二十二卷第三号、昭和五十一年三月）でみたように、昭和十三年九月以降、昭和十四年四月一日までに発表された小説が、収載されています。したがって、もしこの「葉櫻と魔笛」が、「若草」昭和十四年四月號に発表されていたとすれば、この期の作品のうちで、「葉櫻と魔笛」一篇だけが、短篇集『女生徒』に記載されなかったこととなります。しかし、「短篇集

『女生徒』の成立」でみた、短篇集『女生徒』編輯の態度から推せば、そういうことはありえないのではないかと思うのです。つまり「葉櫻と魔笛」は、昭和十四年四月の発表ではなく、昭和十四年五月以降の発表であろうと、思うのです。

つぎに、第二の根拠は、「太宰が作家生活十五年の間、座右を離さず使つてゐた創作手帳」（『晩年 太宰治全集 第一巻（近代文庫18）』創芸社、昭和二十七年三月十五日刊所載津島美知子夫人「後記」）との関連から、考えられることです。

この「創作手帳」の一部が、「太宰治全集附録第二號」（八雲書店、昭和二十三年九月三十日）に、写真で掲載されています。同じ附録の「あとがき」によれば、「創作手帳」とは、つぎのようなものです。

寫眞で御覽の通り家計簿であります。昭和八年四月「魚服記」「海豹」（發表雜誌名）というところから昭和二十二年十月小説「おさん」改造というところで終つて居ります。裏表紙には、計畫されたい小説の題や、創作ノートともいふべき斷片が、たくさん、しるされてあります。

「太宰治全集附録第二號」に所載の写真は、この「創作手帳」の、昭和十四年五月から八月にかけての部分です。また、『太宰治全集 おしやれ童子 第四卷』（八雲書店、昭和二十三年九月三十日）の巻頭には、「創作手帳」の裏表紙の部分が、写真で所載されています。これらの「創作手帳」の写真のうちから、まず「太宰治全集附録第二號」所載の写真によって、この稿に関連する部分を引用してみますと、つぎのように記されています。

7 八十八夜 新 潮 35

8 コント（ア、秋） 若 草 5

美少女 月刊文章 15

畜犬談 文学 者 31

つぎに、『太宰治全集 おしゃれ童子 第四卷』巻頭所載の写真によれば、

十一月

十五日 新潮 小説二十枚 (正月号)

三十日 知性 小説三十枚 (正月号)

と記され、また、

十一月十五日—新潮20 (小説)

二十日—婦人画報40 (小説)

二十五日—作品倶楽部15 (小説)

三十日—知性30 (小説)

と記されています。

ところで、これら〈創作手帳〉の記述と、初期作品年譜類、たとえば「日本讀書新聞」(第四四七號「作家太宰治」昭和二十三年六月三十日)所載の「太宰治主要作品年譜」、岸金剛氏著『太宰治の作品とそのモデル』(城南社、昭和二十三年八月十五日)所載の「太宰治作品年譜」、「太宰治全集附録第二號」所載の「おしゃれ童子(第四卷)創作年表」、「太宰治全集附録第四號」(八雲書店、昭和二十三年十一月三十日)所載の「駄込み訴へ 創作年表」等々の記述とを、比較してみますと、確実に一致していることがわかります。したがって、これらの初期作品年譜類は、この〈創作手帳〉によって作成されたものと、考えてよいと思われまゝ。もし、そう考えてよいとすれば、この〈創作手帳〉に記された〈7〉〈8〉の月は、発表予定月あるいは脱稿月であつて、発表されたのちに記された、実際の発表月ではないわけです。そのために、〈創作手帳〉に記された〈月〉と、実際の発表月とのずれが生じている、と考へられましよう。

そのずれをみますと、つぎのようになっています。(2)は七月に記されたものが八月に、(4)は八月に記されたものが十月に、(5)も八月に記されたものが十月に、(6)もまた、八月に記されたものが十月にと発表されていて、すべて〈創作手帳〉に記された〈月〉よりも、実際の発表月の方があとになっているわけです。さらに、さきの初期作品年譜類は、〈創作手帳〉の記述に従って記されたもの、という推定が成立するとすれば、(7)は九月に記されたものが十一月に、(8)も九月に記されたものが十一月に、(9)もまた九月に記されたものが十一月にと、ずれていることになりましたが、しかし(10)(11)(12)(14)は、〈創作手帳〉に記された〈月〉のとおりに発表されたということになります。以上をまとめれば、(2)の一篇は一か月、(4)(5)(6)(7)(8)(9)の六篇は二か月、ともにあとへずれていて、(10)(11)(12)(13)(14)の五篇が、〈創作手帳〉に記された〈月〉のとおりに発表されていることになりました。そして、〈創作手帳〉に記された〈月〉のとおりに発表された五篇のうち、(10)(11)(12)(13)の四篇は、「正月号」の発表であった、ということになります。「正月号」の発表は、なぜ〈創作手帳〉に記された〈月〉のとおりに発表されたのか、それは、〈月〉の性格からだ、といえるのではないかと思います。もし、そのように考えることが可能であるとすれば、(1)「葉櫻と魔笛」の実際の発表は、〈四月〉よりあとである可能性がつよいといえましょう。さらに、(1)がもし、実際には〈四月〉よりのちに発表されたとすれば、(4)(5)(6)(7)(8)(9)の諸例から考えて、〈六月〉の可能性が強い、と思われまゝす。すべての「太宰治年譜」で、昭和十四年「『月刊文章』四月号」の発表とされている随想「春晝」は、この「葉櫻と魔笛」と同様、昭和十四年四月と、〈創作手帳〉に記されているものと思われまゝすが、実際の発表は「月刊文章」昭和十四年六月号（第五卷第六号、昭和十四年六月一日）になっています。

第三の根拠は、ここまで考証したのちに入手した、当時の「若草」広告から、考えられることです。すなわち、「毎日新聞」昭和十四年三月十四日付（第二萬八十六號）に、「若草／4月號」の広告が所載されていますが、それには、「葉櫻と魔笛」あるいは「太宰治」の名は記されておらず、「毎日新聞」昭和十四年五月十四日付（第二萬百四十六號）

所載の「若草／6月號」広告に、

葉櫻と魔笛（小説）……太宰治

と、明確に記されているのです。

以上の三つの根拠から、「葉櫻と魔笛」は、「若草」昭和十四年六月号の発表と、断じていいと思うのです。なお、この三つの根拠のうち、第一、第二の根拠は、すでに記したように、第三の根拠となる資料を入手するまえに、記したものです。したがって、第三の根拠によって(1)の初出が明確となったいまでは、蛇足とも読める記述かと思われる。しかし、この記述も、まだ直接所載誌によって確認していない現在、証拠のための意味はあるかと思ひ、削除せずにおきます。ともあれ、これらの問題は、「葉櫻と魔笛」の所載誌さえあれば、すべて氷釈霧消するものです。所蔵者によって、明示されることを念じてやみません。

さて、この小説集『皮膚と心』は、太宰治第五の著書『女生徒』につぐ、第六の著書にあたり、『女生徒』に収載の小説より、後に発表された小説が、収載されています。すなわち、昭和十四年六月一日発行の「若草」に発表された「葉櫻と魔笛」以後、昭和十五年三月一日発行の「婦人畫報」に発表された「老ハイデルベルヒ」までの小説が、収載されているわけです。ただし、この間に発表されて、小説集『皮膚と心』に収載されなかった小説があります。

それは、「春の盜賊」（「文藝日本」第二卷第一號、昭和十五年一月一日）、「駈込み訴へ」（「中央公論」第五十五年第二號、第六百三十號、昭和十五年二月一日）と、さらに連載小説もふくむとすれば、「女の決闘（中篇）」連載第一回（「月刊文章」第六卷第一號、昭和十五年一月一日）、「女の決闘（中篇）」連載第二回（「月刊文章」第六卷第二號、昭和十五年二月一日）、「女の決闘（中篇）」連載第三回（「月刊文章」第六卷第三號、昭和十五年三月一日）等とです。これらは、なぜ小説集『皮膚と心』に収載されなかったのか、つぎにその問題を考えておきたいと思ひます。

このうち、まず「女の決闘」は、連載小説であつて、「月刊文章」昭和十五年六月號（第六卷第六號、昭和十五年六月一日）で完結したものです。したがつて、小説集『皮膚と心』発行の昭和十五年四月二十日の時点では、未完であつたわけですから、収載されなかつたのは当然のことといえます。

では、「春の盜賊」と「駈込み訴へ」とは、なぜ小説集『皮膚と心』に収載されなかつたのか。この問題については、昭和十五年四月頃付竹村坦氏宛手紙の、つぎの一節が明確に物語つてくれます。

原稿不足の由、ただいま別封速達書留にて「老ハイデルベルヒ」一篇お送りいたします。つい先日、發表したばかりのものですから、巻末に（「鷗」の次に）入れて編輯して下さい。／他に二篇ほど正月に發表した小説があつたのでございますけれど、それは、もう他の出版所のかたが持つていつてしまつて手許には今なにもございません。／河出書房ですが、六、七月ごろに原稿のたまり次第刊行するのださうです。でも私としても、竹村さんのと鉢合せしないやうなるべく延引して刊行するやう心掛けて居りますから、その點は何卒御休心下さい。／以上、實情のままにて、なんの氣持の駈引もないこと信じて下さい。（傍点山内）

ここで「他に二篇ほど正月に發表した小説があつた」といつている「二篇」とは、「春の盜賊」と「駈込み訴へ」の「二篇」と思われます。「駈込み訴へ」は、「正月に發表した小説」ではないのですが、短篇集『女生徒』の發刊以後に發表し、「老ハイデルベルヒ」發表時点以前に發表された「小説」で、小説集『皮膚と心』に収載されなかつた「小説」は、「春の盜賊」と「駈込み訴へ」の「二篇」しかないのです。したがつて、ここにいう「二篇」とは、「春の盜賊」と「駈込み訴へ」の「二篇」をさす、と考えておくのが妥当でしょう。この「二篇」を、他の出版所のかたが持つていつてしまつた、というのですが、この「二篇」は、小説集『女の決闘』（河出書房、昭和十五年六月十五日）に収載されていますから、「他の出版所」が、「河出書房」であるというのは、まちがいないといえるでしょう。



ともあれ、この太宰治の手紙の記述を信ずるとすれば、まず、(a) 小説集『皮膚と心』には、第五の著書『女生徒』に収載の小説よりものに発表した(1)―(13)の小説を、収載の予定であった、そして、(b) それにつづく「春の盜賊」「駆込み訴へ」の「二篇」は、つぎの小説集『女の決闘』に収載する予定で、すでに出版所の河出書房にわたしてしまっていた、ところが、(c) 竹村書房から「原稿不足の由」いつてきたため、まだわたしていなくて既発表であった一篇「老ハイデルベルヒ」を、竹村書房宛送付した、という事情であったと考えられます。へ太宰治の記述を信ずるとすれば」というのは、(b) の、「二篇」をすでに河出書房にわたしてしまっていたか否かに、多少の疑問を覚えるからです。けれども、「春の盜賊」と「駆込み訴へ」との「二篇」が、小説集『皮膚と心』に収載されなかった理由は、ともかく、(a) (b) (c) の事情を骨子とするものであったことは、まちがいないと考えられます。

かくして、小説集『皮膚と心』収載の作品は、初出に即していえば、前著の短篇集『女生徒』に収載の小説よりものに発表した小説で、昭和十五年一月一日発行の諸雑誌に発表した小説までの、すべての小説を収載し、それにのち、昭和十五年三月一日発表の「老ハイデルベルヒ」を加えて成ったもの、といえましょう。

## II

さて、このように発表された小説が、小説集『皮膚と心』として成立したのはいつのことか、つぎにその問題を考察してみたいと思います。

このうちまず書名「皮膚と心」は、小説集『皮膚と心』に収載の一作品、短篇「皮膚と心」の題名に由来することは明確です。この短篇「皮膚と心」の題名の成立は、いつのことか。「皮膚と心」の所載誌「文學界」の奥付には、「昭和十四年十月十日印刷」と記されています。そして、同誌所載の一篇文章、芳賀檀氏「ナチス文化批判」の文末に

は、(九、卅)と脱稿月日が記されています。したがって、短篇「皮膚と心」の成立は、昭和十四年九月中のことと考えられ、また、短篇「皮膚と心」の題名の成立も、昭和十四年九月末日までのことと、考えられましょう。しかし、この一短篇の題名「皮膚と心」を、小説集『皮膚と心』の書名として使用するにいたった因由、および、〈皮膚と心〉を書名とすることに決定した時期等については、現在の資料では不明のようです。

つぎに、小説集『皮膚と心』収載の作品が、すべて完成したのはいつのことか、その問題を考察してみます。

まず(1)の「葉櫻と魔笛」の成立については、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」(「太宰治全集附録第四號」八雲書店、昭和二十三年十一月三十日)に記された、つぎの一節が参考になります。

「女生徒」をはじめ、第三卷の I can speak 以後、第四卷全部と、この巻の「春の盜賊」合せて十數篇の作品が、十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た。けれど、このうち、「懶惰の歌留多」と「花燭」と、十五年六月に發表した「古典風」は、甲府に來るまへ、舊稿があつたから、昭和十三年以前に書いたものらしい。題も「悖徳の歌留多」「貴族風」となつてゐたのを改め、手を入れて發表したと記憶する。

ここで、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」といわれる〈十數篇の作品〉の裡に、「葉櫻と魔笛」は、ふくまれているわけです。〈舊稿があつた〉作品には、ふれられてゐるところから、「葉櫻と魔笛」には〈舊稿〉はなかつたものと断ぜられます。さらに、「御崎町から三鷹へ」には、さきの一節につづけて、つぎのようにも記されています。

「女生徒」の外では、「葉櫻と魔笛」を、井伏さんがほめて下さつたさうで、太宰は、意外だ、ふしぎだと言つてゐた。これは、近くに住む一老婦人が、若いとき、日本海岸で、日本海々戦のとどろとどろといふ砲聲を聞いたといふ話からヒントを得て書いた。この中に出てゐる、桃の花の歌は、この作品よりもつと前に出来てゐたやうで、醉餘のたはむれに、この歌をよく障子紙などに書いて人に上げてゐた。由來を聞いた人があるが、答へな

かつた。

ここにいう、ヒントを得た話をした〈近くに住む一老婦人〉とは、文の展開から推して、〈御崎町五十六番地〉の大宰治の住居の〈近くに住む一老婦人〉と考えられます。さらに、〈いふ話からヒントを得て書いた。〉という表記は、そのできごとが、結婚後のできごとであって、夫人は知悉しているできごとであることを、示していると考えられます。ところで、太宰治が津島美知子夫人と結婚をしたのは、昭和十四年一月四日付高田英之助氏宛葉書等によれば、昭和十四年一月八日のことであり、その日、「風のやうに行つてすぐまた甲府へ歸り」（昭和十四年一月十日付井伏鱒二氏宛手紙）、甲府市御崎町五十六番地の新居におちついています。そして、この甲府の家をひきはらい、東京府下三鷹村下連雀百十三番地に移転したのは、「無趣味」（「新潮」第三十七年第三號、昭和十五年三月一日）によれば、昭和十四年の〈九月一日〉のことです。かくして「御崎町から三鷹へ」の夫人の記述に即していえば、「葉櫻と魔笛」は、「十四年一月から八月まで」の間に、「御崎町の家で出来た」作品であって、〈舊稿〉はなかつたと断じられます。

では「葉櫻と魔笛」は、「十四年一月から八月まで」の間の、いつごろ脱稿したものか、これについては、〈妥当な〉と思われる、推測をするよりほか、仕方がないようです。「葉櫻と魔笛」が、「若草」昭和十四年六月號の発表であつたとすれば、「若草」六月號は、「毎日新聞」昭和十四年五月十四日付に広告が掲載されているところから、ほぼその頃発行されたものと思われまゝ。したがって、その脱稿は、昭和十四年四月末ごろまでのことであつたと、推測しておくのが〈妥当な〉見解かと思われまゝ。

つぎの(2)「八十八夜」も、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」のさきの一節によれば、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」作品と判断されます。「八十八夜」は、自画像的人物、笠井一を主人公とした物語です。彼は、一寸さきは闇の中にいて、芋虫のような不断の地味な努力をつづけていたのですが、五月のはじめ、おのれの

芋虫にうんじ果て、忍従の鎖を断ちきって、信州上諏訪へと、脱走のひとり旅にでます。「なにか光を。」と、求めてでたこの旅の体験の記述が、「八十八夜」の主要部分を占めている、といっているのですが、その記述の素材となったのは、すでに拙稿「八十八夜」(『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日)にも指摘したように、昭和十四年五月へ八十八夜のころ、美知子夫人と信州に旅し、上諏訪、蓼科温泉にあそんだ時の、体験であったようです。「御崎町から三鷹へ」にも、つぎのような記述がみられます。

八十八夜のころ、諏訪から、蓼科の方へまはつた。この時、上諏訪の宿では、酔つて、はめを外してしまつて、むやみに卓上電話を帳場にかけて、テーブルクロスを汚して、辨償させられたりして失敗だつた。蓼科では、蛇がこはいといつてせつかくの風景をたのしむこともなかつた。大體、野外を歩くことや、樹木、風景などには、興味が無いやうに見えた。

このへ上諏訪の宿での様子は、「八十八夜」の宿の場面を、彷彿とさせます。かくして「八十八夜」は、昭和十四年五月の旅のちに、執筆されたものと断じて、いいかと思われまゝ。

ところで、「八十八夜」所載誌「新潮」は、「昭和十四年七月十日印刷納本」であり、その広告が、「朝日新聞」昭和十四年七月十四日付(第二萬七百四十一號)に、所載されています。したがって、原稿締切は昭和十四年六月末までのことであつたと、考えられます。かくして「八十八夜」は、昭和十四年五月から六月末日までの間に、執筆完成されたと推定しうるように思われます。

(3)「座興に非ず」もまた、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」のさきの一節によれば、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」作品と判断されます。「座興に非ず」の冒頭近くに、「九月もなかなば過ぎた頃のことである。」と記されていて、へ昭和十四年九月中旬への執筆脱稿と、推測できるようにも思われます。しかし、「座興に非ず」所載の「文學者」九月號は、奥付によれば、「昭和十四年八月十八日印刷納本」であり、また、のちに検討

する「畜犬談」の執筆脱稿日からも、七月中旬から七月末日の間、おそらくとも八月上旬までの執筆脱稿と、推定されるように思います。「九月もなかなば過ぎた頃のことである。」という表記は、この〈小品〉の読者の目にふれる季節を、念頭においてのものと考えられるでしょう。

さらに、(4)「ア、秋」も、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」の一節によれば、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」作品と判断されます。その「一月から、八月まで」の間の、いつ執筆し脱稿したものか、はくは「ア、秋」の文面から、八月だろうと思うのです。たとえば、「家の者が、夏をよろこび海へ行かうか、山へ行かうかなど、はしやいで言つてゐるのを見ると、ふびんに思ふ。もう秋が、夏と一緒に忍び込んで来てゐるのに、秋は、根強い曲者である。」その他、「ア、秋」には、晩夏に執筆されている雰囲気、たしかにただよっているように思われます。

この「ア、秋」所載誌「若草」十月號は、「昭和十四年九月十日印刷納本」となっていて、「毎日新聞」昭和十四年九月十四日号（第二萬二百六十九號）に、広告が所載されています。したがって、その発行は昭和十四年九月十四五日頃であつたと思われまゝ。かくして、「ア、秋」の執筆脱稿は、昭和十四年八月中のことであつたと推定されます。

つぎに、(5)「畜犬談」も、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」の一節によれば、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」作品と判断されます。「畜犬談」は、太宰治みずからの身辺の出来事を素材とした作品であり、作中の各所に、太宰治の実生活上の事実が織りこまれていきます。そのことを念頭において「畜犬談」を読めば、八月中の執筆であることは、あきらかだと思われまゝ。たとえば、「畜犬談」の一節、「この犬は、三月、四月、五月、六、七、八、そろそろ秋風吹きはじめて来た現在にいたるまで、私の家に居るのである。」の執筆時点に関する表記は、〈事実〉だとばかりは思うのです。

その左証となるのが、「畜犬談」の裡にあらわれる〈移轉〉に関する記述です。引用が断片的となりますが、「畜犬談」の裡には、たとえばつぎのような諸節がみられます。

(a) 七月にはひつて、異變が起つた。私たちは、やつと、東京の三鷹村に、建築最中の小さい家を見つけるところまで来て、その完成し次第、一ヶ月二十四圓で貸してもらへるやうに、家主と契約の證書交して、そろそろ移轉の仕度をはじめた。家ができ上ると、家主からすぐ速達で通知が来ることになってゐたのである。

(b) 私たちは、三鷹の家主からの速達を一心に待つてゐた。七月末には、できるでせうといふ家主の言葉であつたのだが、七月もそろそろおしまひになりにかけて、けふか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまつてゐたのであつたが、仲々、通知が来ないのである。問ひ合せの手紙を出したりなどしてゐる時に、ポチの皮膚病がはじまつたのである。

(c) 三鷹の家主から返事が来た。読んで、がっかりした。雨が降りつづいて壁が乾かず、また人手も不足で、完成までには、もう十日くらゐかかる見込み、といふのであつた。うんざりした。ポチから逃れるためにだけでも、早く、引越してしまひたかつたのだ。私は、へんな焦躁感で、仕事も手につかず、雑誌を読んだり、酒を呑んだりした。

(d) 家主からは、更に二十日待て、と手紙が来て、私のごちやごちやの忿懣が、たちまち手近かのポチに結びついて、こいつ在るがために、このやうに諸事圓滑にすすまないのだ、と何もかも悪いことは皆、ポチのせいみに考へられ、奇妙にポチを呪咀し、或る夜、私の寢巻に犬の蚤が傳播されて在ることを發見するに及んで、ついにそれまで堪へに堪へて來た怒りが爆發し、私は、ひそかに重大の決意をした。

「畜犬談」には、(d)の〈重大の決意をした〉、その〈翌る朝〉までの出来事が、記されています。したがって、この「畜犬談」の記述に即していえば、「畜犬談」は、昭和十四年八月十日前後に、「家主からは、更に二十日待て、

と手紙が来て、「それからしばらくたった、「そろそろ秋風吹きはじめて来た現在」、執筆されたものと判断されま  
す。

ところで、この(a)―(d)にみられる〈移轉〉に関する記述は、太宰治の実生活上の事実と、的確に照応して  
いると思われます。太宰治の書簡から、〈移轉〉に関連する記述をひろってみると、つぎのような諸文がみられま  
す。まず、(e)昭和十四年七月十九日付蟠崎潤氏宛手紙には、「三鷹に家を見つけ、八月はじめに移住すること  
になりました。」という記述がみられます。これは、「畜犬談」(a)の記述、および、(b)の「七月末には、  
できるでせうといふ家主の言葉であつた」という記述に、的確に照応しています。つぎに、(f)昭和十四年八月八  
日付高田英之助氏宛葉書には、「私たち、十日頃、移轉の筈です。」という記述がみられます。これは、(c)の「  
もう十日くらゐかかる見込み、といふのであつた。」という記述に、的確に照応しています。さらに、(g)昭和十  
四年八月十日付山岸外史氏宛葉書には、「三鷹の家が、豫定どほり完成せず、たいてい十日ごろと家主から言つて來ま  
したが、今日あたり、確實の知らせ來るだらうと思つてゐます。豫想とちがつたので、イライラ仕事も出來ず、毎  
日毎日、本ばかり讀んでゐます。」という記述が見られます。これはまた、(c)の記述全体に、的確に照応してい  
ます。さらに「豫想とちがつたので、イライラ仕事も出來ず」という心情は、やがて「畜犬談」(d)に記されたよ  
うな心情に發展する、可能性を予想させます。ただしこの(d)の「ポチ」に関する記述は、どこまでが事実を踏ま  
えたものであるのかは、わかりません。しかし、『玩具(あづみ文庫)』(あづみ書房、昭和二十一年八月十日)の  
「あとがき」によれば、「甲府では私は本當に野良犬どもに悩まされた。はじめは大まじめで、この鬱憤を晴らすつ  
もりで取りかかつた」とのことです。したがって、〈移轉〉の遅延した〈忿懣〉が、「手近の」犬「に結びついて」、  
犬を「呪咀し」、「この鬱憤を」犬によって「晴らす」というような心情に發展したことは、事実であつたのではな  
いかと思います。また、太宰治の「無趣味」(「新潮」第三十七卷第三號、昭和十五年三月一日)によれば、「三鷹

の奥に移り住んだのは、昨年の九月一日である。」と記されています。これは、(d)の「家主からは、更に二十日待て、と手紙が来て、」という記述と、的確に照応しているようです。かくして、「畜犬談」の〈移轉〉に関する記述は、実生活上の事実の展開に即した形で、記述されているといえるでしょう。このことを前提にして、「畜犬談」の執筆〈現在〉の時点を推定すれば、つぎのようにいえるかと思えます。

まず、「畜犬談」(d)の、「家主から」、「更に二十日待て、と手紙が来」たのは、太宰治書簡八月十日付(g)から、八月十日以後のことだと思われます。さらに、同じ書簡の記述から推測すれば、八月八、九日頃、太宰治は家主に〈問ひ合せの手紙〉を出したであろう、したがって、「今日あたり、確實の知らせ来るだらうと思つてゐます」というのは、その〈問ひ合せの手紙〉に対する〈返事〉のことであろう、と判断されるかと思えます。とすれば、「更に二十日待て」という〈返事〉の手紙がきたのは、太宰治が予想したとおりの、〈今日あたり〉、すなわち八月十日か十一日であつたと、考えられるでしょう。

つぎに、「畜犬談」(d)の、「ひそかに重大の決意をした」〈或る夜〉とは、(d)の記述から、「更に二十日待て、と手紙が来」た当日ではなく、すくなくとも、それから二、三日はたった〈或る夜〉のことだ、といえましよう。かくして、「畜犬談」の執筆〈現在〉の時点は、「そろそろ秋風吹きはじめて来た現在」という表記との関連からも、昭和十四年八月十二、三日以後だと、いえるように思ふのです。

では、「畜犬談」の脱稿は、いつのことか。所載誌「文學者」十月號は、奥付によれば、「昭和十四年九月十八日印刷納本」となっています。すでにみた「文藝」「文學界」「新潮」「若草」等は、すべて、「十日印刷納本」となっていて、十四日に広告が掲載されています。これら他誌と比較して、〈印刷納本〉日は、八日おそいわけですが、しかし、「文學者」の〈印刷納本〉日というのは、ほぼ実際の発行日に近いのではないかと思われます。のちにふれる「デカダン抗議」の所載誌「文藝世紀」と、ほぼ同じ頃発行されたのではないかと思ふのです。さらに、すでにみ



てきた（移轉）の状況ともからませて推測すれば、「畜犬談」の執筆脱稿は、昭和十四年八月中旬から八月末日の間と、考えられるかと思ひます。

なお「畜犬談」には、「伊馬鵜平君に與へる」という、サブ・タイトルが付されています。これに関し伊馬春部（鵜平）氏は、「『畜犬談』をめぐつて」（『太宰治全集附録第二號』八雲書店、昭和二十三年九月三十日）に、つぎのように記されています。

「畜犬談」が、十四年の夏のたしか「文藝」——ちやなかつたかと思ふが、發表せられて以來今日にいたるまで、私はよく質問を受ける。サヴ・タイトルに「伊馬鵜平君に與へる」としてあるデジケイトの語についてである。どういふわけかといふのである。鵜平といふのは私の舊名、しかし召集されて海を渡らせられ二等兵の味氣ない日々をおくつてゐたころ、ある外出日、在留邦人の一人から訊ねられた時はうれしかつた。異境であつただけ、それだけ友情の暖さといふものが、しみじみと、泪の出るほど感じられた。／それにしても「與へる」といふのは、變ではないか。だといつて「捧ぐ」ではなほ變だし、「おくる」でもびつたりしなからう。「與へる」ところに意味があるのであり、しかしそれかといつて人には説明したこともない。美知子夫人にでもきけば、此作は結婚當初の作品だけに、なぜあんなサヴ・タイトルを附加したか、ひよつとしたらわかるかと思ふが、これまで訊いてみたこともないし、今はまだそんなことのきける心の餘裕まではとり戻してはゐない。／それは一つには、私自身にはなんとなくわかつてるやうな氣もしてゐるからである。この時からひそかに私は、お返しせなければならぬ負擔を感じてゐて、實はこの三月頃發表になつたある作品に、ひそかに「D君におくる」としておいたが、そして彼へも送つたが、果して讀んでくれたかどうか。きかないうちに、彼は永遠の旅立ちをしてしまつた。しつかりしたお返しができないうちにさういふことになつてしまつて、此點、私は非常に殘念である。／「畜犬談」の中に、犬に右脚を喰ひつかれ狂犬病を怖れて三七、二十一日間、病院に通つた「友人」が出て來るが、あれが

私とすれば大へんな誇張である。私は單に狂犬病がいか怖るべき厄介な病氣であるか、話をしたことがあるにすぎない。私が「與へ」られたのは、かういふ事象ではなく、むしろもつと本質的なところにあるのだ。私への警醒であるかもしれない。その頃の私の生きぶりや爲事ぶりを反省してみなければ、ほんたうのところはわからない。最近の彼の作風―音色から考へればともかくも、あの當時の彼にしてみればあゝいふ發想をしたことについての一つの辯明が、自己みづからに對しても必要だつたのであらう。

この「『畜犬談』をめぐつて」は、のち伊馬春部氏の著『櫻桃の記』（筑摩書房、昭和四十二年十月十日）に収載され、そのとき、「十四年の夏のたしか『文藝』」という表記が、「十四年の夏のたしか『文學者』」と改められ、さらに、「へ註」が付されて、「このことについて彼が隨筆に書いているのを後に発見した。」と記されました。この「隨筆」というのは、水谷昭夫氏が「畜犬談」（『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日）で指摘された、「玩具」の「あとがき」のことだと思われまゝす。その『玩具』の「あとがき」には、つぎのように記されています。

「畜犬談」も、いくらか皮膚病嫌惡の小説みたいなどころもあるが、甲府では私は本當に野良犬どもに惱まされた。はじめは大まじめで、この鬱憤を晴らすつもりで取りかかったのだが、書いてゐるうちに、滑稽になつてしまつた。憤慨もまた度を起すと、滑稽に止揚するものらしい。書き終へて讀みかへしてみたら、まるでもう滑稽物語になつてしまつてゐたので、これは當時のユウモア小説の俊才、伊馬鶴平君に捧げる事にしたのである。

のち、伊馬春部氏は「太宰治ノオト」（『社会人』第二十五卷第七号「特集・太宰治における生と死」昭和四十八年七月一日）に、この「あとがき」を引用されてつぎのように記されています。

これは昭和二十一年正月の執筆らしいが、すると疎開先の津輕金木の生家で、といふことになる。私がまだ大陸から復員してゐないころで、ちやうど彼が井伏鱒二先生宛の書簡（一月十五日発）の中で、「伊馬君はどうし

てゐるでせうか。未帰還の友人が氣になつていけません。」としるしてゐる時機に該当する。／生死のほど不明といふのに、ひよつとしたら戦死していたかもしれないといふのに、そんなさな私のことをこんなふうに念頭においてくれてゐたのかと思ふと、ちよつとじいんとくるものがある。「捧げることにした」のであつたのならなぜ「与へる」としたのかなといふ疑問もこの際はひっこめることにしたい。

(6)の「美少女」もまた、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」の一節によれば、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」作品と判断されます。が、「美少女」には、さらに、執筆時点を推測する手がかりとなる、つぎのような一節もみられます。

ことしの正月から山梨縣、甲府市のまちはづれに小さい家を借り、少しづつ、貧しい仕事をすゝめてもう、はや半年すぎてしまつた。六月にはひると、盆地特有の猛烈の暑熱が、ぢり／＼やつて来て、北國育ちの私は、その假借<sup>かりか</sup>なき、地の底から湧きかへるやうな熱氣には、仰天した。(略)／七月、暑熱は極點に達した。疊が、かつかつと熱いので、寝ても坐つても居られない。よつぽど、山の温泉にでも避難しようかと思つたが、八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐるし、そのために少しお金を残して置かなければならないのだから、温泉などへ行く餘分のお金が、どうしても都合つかないのである。

この一節から、執筆時点を推測するとき、二様の解釈が成りたつかと思ひます。すなわち、(一)「七月、暑熱は極點に達した。」「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」という「美少女」の表記を、そのまま執筆時点での感覚と解し、へ七月の執筆とする解釈と、(二)それらの「美少女」の表記を、へ七月の時点に視点を置いた表記と解し、実際の執筆時点は八月以降であるとする解釈との、二様の解釈です。このうち、どちらの解釈が妥当であるか。以下に、その考証をしていきたいと思うのですが、結論を先にいえば、「美少女」の文面から感じられる、太宰治の執筆時の感覚から推して、(一)の解釈が妥当なように思われます。

さて、「太宰治全集附録第二號」所載の「創作年表の一部」には、つぎのような記録がみられます。

隨筆

6 人間キリスト記 文筆 5

7 八十八夜 新潮 35

ア、秋

8 コント 若草 5

美少女 月刊文章 15

畜犬談 文学者 31

このうち、まず最初の〈6〉〈7〉〈8〉は、發表予定月かとも思われます。〈6〉の「人間キリスト記」を例にとつてみますと、昭和十四年五月四日付山岸外史氏宛葉書に、「『文筆』の六月號に貴兄のお仕事のこと、ほんの少し書きましたが、御海容下さい。」とあります。だが、この「人間キリスト記」その他は、「文筆」六月號ではなく、初夏隨筆號（昭和十四年七月十日發行）に發表されています。したがって、〈6〉は、脱稿月でも、實際の發表月でもなく、發表予定月であると考えられるかと思ひます。そのあとは、作品題名、發表誌名、作品の枚数等が記されている、と考えられましょう。

ところで、先にみたように、「ア、秋」は〈八月中〉の執筆脱稿、「畜犬談」は〈八月中旬から八月末日の間〉の執筆脱稿と推定されます。この推定が、あやまりでないと思へば、〈8〉は、發表予定月ではなく、（A）脱稿月あるいは（B）脱稿予定月である、ということになるでしょう。（A）は、〈創作手帳〉に、作品題名や枚数まで記されているところから、これらをすべて作品脱稿後の記録とする解釈であり、（B）は、枚数や作品題名は、脱稿後の記録であろうが、月と誌名とは、すでに注文のあつた時に記されていたであろうとする解釈です。

このうち、どちらの解釈が妥当であるか、ということとは、容易には決定しがたいように思われます。なぜなら、〈創作手帳〉の記録は、脱稿後か、一部脱稿前一部脱稿後かのいずれかに統一されているのではなく、時に応じて、すべて脱稿後に記されていることもあり、また、一部脱稿前、一部脱稿後に記されていることもあったと、推定されるからです。しかし、〈8ヶ月の項の「コント 若草」の記録は、あきらかに、脱稿前のものであらうと、推定されるかと思ひます。この「ア、秋」の項は、同じ行に、「8 コント 若草 5」と記され、別行に補足のかたちで、「ア、秋」の題名が記されています。この記録の仕方は、「コント」と脱稿前に記しておき、「ア、秋」の題名を脱稿後に記した証左と、考えられましよう。もしこの推定があやまりでないとすれば、「ア、秋」は、かならずしも、「美少女」の脱稿前の脱稿とはかぎらず、「美少女」の脱稿後の脱稿である可能性も、充分あるかと思われまします。かくして、さきの（一）の解釈は、〈創作手帳〉の記録からも、成り立ちうるといえるようです。

さらに、さきに引用した「美少女」の一節の裡の、「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」の表記も、（一）の解釈が、妥当である証拠になるかと思われまします。以下に、太宰治の書簡集を通してみられる実生活上の事実と、「美少女」の表記との関連を考察し、（一）の解釈の妥当性を、考証してみたいと思ひます。

まず、昭和十四年六月四日付竹村坦氏宛はがきには、つぎのような一節がみられます。

一昨日、二日朝六時に甲府を出發して、國分寺、三鷹、吉祥寺、西荻、荻窪、片っぱしから、踏破し、貸家さがしましたが見當らず、いまさらながら驚きました。／でも、吉祥寺、井の頭公園の裏に、あと一ヶ月くらゐで、建つ筈の、二十三、四圓の家賃段もそんなに高くないので、六月下旬にまたそこへ出かけて、建築に着手してゐるなら、交渉して、すぐきめてしまはうと思ひ、まづ、それにきめて、かへりましたが、甲府もそろそろ焼きつけるやうに暑く、早く井の頭のはうへ行きたく思ひます。

この六月四日付はがきの、「甲府もそろそろ焼きつけるやうに暑く、早く井の頭のはうへ行きたく思ひます。」の

表記は、さきに引用した「美少女」の一節、「六月にはひると、盆地特有の猛烈の暑熱が、ぢり／＼やつて来て、北國育ちの私は、その假借<sup>かりか</sup>なき、地の底から湧きかへるやうな熱氣には、仰天した。」の表記に、的確に照応しています。そして、この「盆地特有の猛烈の暑熱」が、早く移転したいという想いを、昂めていったといっているようです。昭和十四年七月八日付鰭崎潤氏宛はがきには、さらに、つぎのような一節がみられます。

暑さがひどくなりました。お元氣の御様子で何よりと存じます。おハガキは有難く拜誦いたしました。わざわざ三鷹まで見にいらずしやつた由にて、恐縮です。私どもも、十日すぎごろ、また捜しに上京するつもりで、そのときは、家が未完成でもなんでも、きめてしまはうと存じて居ります。甲府は、もの凄く熱く、このごろは、ぐつたりして、仕事もあまりすすみませぬ。貴方も暑氣あたり、御用心下さいまし。

この七月八日付はがきの「暑さ」に関する記述は、さきに引用した「美少女」の一節、「七月、暑熱は極點に達した。」以下の表記に、また的確に照応している、といえるようです。いわば、「美少女」の、「六月」へ「七月」のへ暑さに関する記述は、実生活上の太宰治の、意識の事実性に即して記されている、といえるようです。とすれば、そのあとの、「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」の記述も、同様に考えてさしつかえないと思われます。

では、「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」という意識は、実生活上の、太宰治の意識の事実性に即すると、いつの時点のものと判断されるか。七月八日付はがきを執筆した時点では、まだへ移轉するゝ家はきまつておらず、「十日すぎごろ、また捜しに上京するつもりで、そのときは、家が未完成でもなんでも、きめてしまはう」という、予定だったといえるようです。そして、七月十四日付山岸外史氏宛はがきに、つぎのように記されることになるのです。

昨日おハガキ申しましたが、明日（十五日）三鷹方面に家を捜しにまゐることになり、そのほか二、三、用事

もたまつて居りますので、その日は親戚の家へ一泊し、十六日午後六時半から、高田馬場「たこ福」で（高田馬場驛下車左へ半丁、活動館並び）會費一圓五十錢にて、酒井松男氏の出版記念會ある由にて、招待もらひましたが、貴兄も御出席することと思ひましたから、私なるべく都合つけて、出るつもりです。そのとき、久しぶりにてお逢ひできたら、うれしく思ひます。

「明日（十五日）三鷹方面に家を捜しにまゐることになり」の表記から、七月八日付で、「十日すぎごろ、また捜しに上京するつもり」といつていた予定が、七月へ十五日に実現することになったのだと、考えられます。そのへ十五日に、太宰治は、へ移轉するへ家をきめてしまったようです。七月十九日付鰐崎潤氏宛手紙には、つぎのように記されています。

家のことで、種々御心配おかけいたし、相すみませんでした。／三鷹に家を見つけ、八月はじめに移住することになりました。移住したらすぐお知らせいたします。小さい家ですよ。東京へ移住したら、また遊びに来て下さい。／まづは取急ぎお知らせ迄。

かくして、「美少女」に記された、「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」という意識は、実生活上の、太宰治の意識の事実性に即すると、昭和十四年七月十五日以後のものであると、判断されます。しかし、十五日、「家を捜しにまゐり」、「そのほか二、三、用事もたまつて居りますので、その日は親戚の家へ一泊し、十六日午後六時半から」の、「酒井松男氏の出版記念會」に「出るつもり」、といっているわけですから、「美少女」の執筆時点は、昭和十四年七月十七日以後のことだと推測されます。さらに、「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」という表記からいえば、「美少女」の執筆時点は、昭和十四年七月末日よりは、少し前までのことであつたと、推測されるでしょう。すでに「畜犬談」の成立を考証した際にみたように、「建築最中」であつたそのへ家は、「七月末には、できるでせうといふ家主の言葉」であり、「でき上ると、家主からすぐ速達で通知が来ることに

なつてゐた」わけです。しかし、「七月もそろそろおしまひになりかけて、けふか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまつて待機してゐた」のですが、「仲々、通知が来」ず、「問ひ合せの手紙を出したりなどしてゐ」ます。やがて、「三鷹の家主から返事が来」ますが、「讀んで、がつかり」、「雨が降りつづいて壁が乾かず、また人手も不足で、完成までには、もう十日くらゐかかる見込み、」という内容だったのです。かくして「美少女」の、「八月には私たち東京近郊に移轉する筈になつてゐる」という、なんのこだわりも感じさせない記述は、「七月もそろそろおしまひになりかけて、けふか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまつて待機してゐた」時点よりは、前の時点での記述と、考えられましよう。というよりは、「引越しの荷物もまとめてしまつて待機」するために、「美少女」を脱稿していた証左となる記述、と考えられるでしょう。かくして、「美少女」の執筆脱稿は、昭和十四年七月十七日から二十七、八日までの間と推測され、(一)の解釈が妥当であると判断される、といえるように思われます。

(7)の「デカダン抗議」も、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」の一節によれば、「十四年一月から、八月まで、御崎町の家で出来た」作品と判断されます。しかし、この「デカダン抗議」以下、「おしやれ童子」「皮膚と心」「短片集」等の諸作品は、「八月まで」に出来た作品ではなく、三鷹に「移轉」した「九月一日」以後の作品ではないかと思われまます。そう考えなければ、九月、十月は、ほとんど作品の執筆が、なかったことになってしまひます。以下に考証していくように、「俗天使」は十一月十五日頃、「美しい兄たち」は十一月二十日頃、「短片集」は十一月二十五日頃、「鷗」は十一月三十日頃の脱稿と推定され、「老ハイデルベルヒ」は、さらにそれよりのちの脱稿と推定されるからです。ではなぜ、「デカダン抗議」以下の諸作品を、「八月まで」に「出来た」作品といわれたのか。おそらくは、「創作手帳」の記述から、推測されたためであらうと思われまます。この「創作手帳」には、すでにふれたように、発表予定月、あるいは脱稿月、脱稿予定月等が記されていますが、初期の太宰治作品年譜類は、ほぼこの「創作手帳」の「月」の記録に即して作成されている、と推測されまます。もしこの推測が正しいとすれば、「創作手



帳」には、〈9〉月の項に、「デカダン抗議」「おしやれ童子」「皮膚と心」等が記されているのではないかと思います。〈創作手帳〉に、そのように記されていたとすれば、夫人がこれらの諸作品を、〈八月まで〉に出来た作品と考えられたのは、当然のことだと思われます。当時の状況から、これらの作品の初出を確認することは、まったく不可能であつたと思われます。

ところで、「デカダン抗議」「おしやれ童子」「皮膚と心」等の実際の初出は、すでに記したように、〈九月〉ではなく、すべて〈十一月號〉でした。したがって、これら諸作品の〈月〉の記録が、〈創作手帳〉で〈9〉月になつていいるとすれば、この〈月〉は発表月ないしは発表予定月ではなく、脱稿月ないしは脱稿予定月だと思われます。すでにみた、「ア、秋」「畜犬談」「美少女」等の、〈創作手帳〉の記録と実際の発表〈月号〉とのずれからも、そのようにいえるかと思われます。

では、「デカダン抗議」の脱稿は、いつのことか。すでに記したように、所載誌「文藝世紀」十一月號は、「昭和十四年十月十九日發行」と記されています。そして、「朝日新聞」にはじめて所載された「文藝世紀」の廣告は、昭和十五年十一月十九日付（第二萬千二百三十五號）の「文藝世紀」十二月號の廣告です。したがって「文藝世紀」十一月號の「發行」日付は、ほぼ実際の發行日に近いのではないかと思います。とすれば、原稿締切日は、〈十月のはじめ頃〉であつたと、推測することができましよう。かくして、「デカダン抗議」の執筆脱稿は、昭和十四年九月下旬から十月はじめの間であつたといえます。が、さらに、〈創作手帳〉に〈9〉月の項に記され、これが〈脱稿月〉であるとするれば、九月下旬と推定することができましよう。

(8)の「おしやれ童子」は、執筆脱稿を明確に推定する、手がかりとなる資料が皆無のようです。が、所載誌「婦人畫報」は、「昭和十四年十月十五日印刷納本」ですから、九月末日ごろの原稿締切であつたと推測され、昭和十四年九月末日までに執筆脱稿したものと推定されましよう。

また(9)「皮膚と心」も、執筆脱稿を推定するための、手がかりとなる資料がみあたらないようです。が、これも、すでに書名「皮膚と心」の成立に関して考証したように、昭和十四年九月末日までに執筆脱稿したものであろうと、推定することはできるようです。

(10)「俗天使」以下、「鷗」「美しい兄たち」「短片集」は、『太宰治全集 おしやれ童子 第四巻』所載の「創作手帳」に記された、執筆予定表が参考になります。各所に記されたその執筆予定表を、整理して示すとつぎのようになります。

十月三十日	月刊文章	長篇	十五枚	(正月号)
十一月五日	知性	隨筆	十五枚	(十二月号)
十一月十三日	懸賞界	隨筆	十枚	
十一月十五日	文藝日本	小説	二十枚	(正月号)
十一月十五日	新潮	小説	二十枚	(正月号)
十一月十五日	讀賣新聞	隨筆	五枚半	
十一月二十日	婦人画報	小説	二十枚	
十一月二十四日		隨筆	六枚	
十一月二十五日	作品俱樂部	小説	十五枚	
十一月三十日	知性	小説	三十枚	(正月号)
十二月五日	文章			
十二月末日	中央公論	小説	三十枚	(二月号)

駈込み訴へ

このうち、「十一月二十四日」の項の発表誌紙名と、「十二月五日」の「文章」誌発表作品の紙数とが、不鮮明のため読み取り不可能です。

さて、右の予定表のうち、「俗天使」の項は、「十一月十五日 新潮 小説 二十枚（正月号）」と、完成予定日を記し、さらに別の個処に、「十一月十五日 新潮 25（小説）」と記して、消されています。そして、「俗天使」本文中、はじめの方に、「けふは、十一月十三日である。」と記されているところから、おそらくは、十一月十三日に執筆に着手されたものと思われます。さらに「俗天使」本文中ははじめの方に、「私はこの雑誌『新潮』に、明後日までに二十枚の短篇を送らなければならぬので、」とありますから、十一月十五日までに「送らなければならぬ」原稿であったといえるようです。かくして、「俗天使」は、十一月中旬に執筆され、予定どおり十一月十五日頃、脱稿したものと推定されます。

なお、津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」によれば、「『俗天使』『鷗』『兄たち』などを、この秋書いた。『俗天使』のおしまひの手紙の主は、『女生徒』のS子さんである。」ということであり、また、井伏鱒二氏「解説」によれば、「俗天使」に関して、津島美知子夫人は、つぎのような記録をされています。

十四年の九月に三鷹町下連雀の畠の中の新築の借家に移りまして、その秋、これを書きました。訪客が多くなりまして、もう御崎町時代のやうにのんびりいなくなりまして。／＼九月一日、引越の日に、一人の訪客がございました。洋畫家でクリスチャンのHさんです。その月から最も頻繁に三鷹へ訪ねてこられました。いつも御愛藏の畫集を携へてこられまして、お蔭様で太宰は居乍ら、古代近世の名畫を鑑賞することが出来たのでございます。「俗天使」中の聖母子の神品も、その中の一枚でございます。又、金太郎の山姥のエロティックは、太宰ごのみなでございまして、「たまらない」と太宰は何度も云つてゐました。のちに「殘菊物語」といふ映畫を観まして、その森赫子扮する乳母にも惹かれてゐる様子でございました。けれど、こんな事は私のひがめかし

れませず「俗天使」といふ作品と何の關係も無いことでせう。それから鳥獸合戦の歌、云云。これも太宰の頭に、ちやんとしくまれてゐた會話でございまして、私はしらないことです。「私と家の者」の會話は、ほかのも大ていさうでございます。

(10)「鷗」も、「創作手帳」に、「十一月三十日 知性 小説三十枚（正月号）」と完成予定日を記し、さらに別の個処に「十一月三十日―知性 30（小説）」と記しているところから、十一月二十五、六日頃から執筆され、十一月三十日頃、脱稿したものと推定されます。

また(12)「美しい兄たち」も、「十一月二十日―婦人画報 40（小説）」と、完成予定日を記しています。執筆予定表から推測すれば、十一月十五日頃から、十一月二十日頃の間に、執筆脱稿したものと推定されましょう。

(13)「短片集」も、「十一月二十五日―作品俱樂部 15（小説）」と完成予定日が記されているところより、十一月二十一日頃から執筆され、十一月二十五日頃までには、脱稿したものと推定されましょう。

つぎの(14)「老ハイデルベルヒ」は、さきの「創作手帳」の執筆予定表には、記されていません。この「創作手帳」に記録されているのは、ごらんのように、〈正月号〉前後に発表された作品ばかりです。したがって、当然のことといえるかもしれませんが、「婦人畫報」三月號のことは、記されていないわけです。またこの執筆予定表からいっても、〈三月號〉の作品を執筆する余裕は、なかったものと思われまゝ。かくして、「老ハイデルベルヒ」は、昭和十四年十二月以降に執筆脱稿したもの、ということになるかと思われまゝ。が、さらに、昭和二十二年一月二十一日付横田俊一氏宛葉書には、「『ハイデルベルヒ』は、昭和十五年（三十二歳）に書きました」と記されていますから、昭和十五年になつてから、執筆されたものであらうと、考えられるようです。そして、「老ハイデルベルヒ」所載の「婦人畫報」は、奥付によれば、「昭和十五年二月十五日印刷納本」されています。かくして、「老ハイデルベルヒ」の執筆脱稿は、昭和十五年一月中のことと、推定されるように思われます。

なお津島美知子夫人「御崎町から三鷹へ」、『女の決闘 太宰治全集第五卷（近代文庫105）』所載「後記」等によれば、この「老ハイデルベルヒ」の一部は口述筆記されたものだそうです。さらに、「御崎町から三鷹へ」には、つぎのような記述がみられます。

六月に、「黄金風景」の賞金五十圓で、修善寺、三島の方へ遊んだ。このときは、失敗が無くて助かった。三島では、なぜか興奮して、きり雨の中に、あやめの咲いてゐる古びた町を、お酒と甘い食物を、探して歩きまわつてゐた。

このときの体験が、「老ハイデルベルヒ」の素材となっていることは、いうまでもありません。

以上に、考証してきた、小説集『皮膚と心』所載作品の成立年月日を、成立順に整理してみますと、つぎのようになります。

「葉櫻と魔笛」

昭和十四年四月末日まで

「八十八夜」

昭和十四年五月から六月末日までの間

「座輿に非ず」

昭和十四年七月中旬から八月上旬までの間

「美少女」

昭和十四年七月十七日から二十七、八日までの間

「ア、秋」

昭和十四年八月中旬から八月末日までの間

「畜犬談」

昭和十四年八月中旬から八月末日までの間

「皮膚と心」

昭和十四年九月末日まで

「おしやれ童子」

昭和十四年九月末日まで

「デカダン抗議」

昭和十四年九月下旬から十月はじめまでの間

「俗天使」

昭和十四年十一月十五日頃

「美しい兄たち」

昭和十四年十一月十五日頃から二十日頃までの間

「短片集」

昭和十四年十一月二十五日頃

「鷗」

昭和十四年十一月三十日頃

「老ハイデルベルヒ」

昭和十五年一月中

かくして小説集『皮膚と心』収載の全作品が完成するのは、昭和十五年一月末日までのことであつたと、考えておいていいように思われます。

付記 この稿は、一連の「太宰治書誌」の一端として執筆した未発表の旧稿「『皮膚と心』の書誌」の一部です。

「『皮膚と心』の書誌」は、VI章からなっていますが、ここでは、紙幅の関係で、Iの一部とIIの全部とを抜き差し掲載させていただきました。